

# 首都圏における座席指定列車を活用した観光客分散の可能性

観光立国の推進に伴い、東京都心部ではオーバーツーリズムや公共交通機関の混雑が深刻化している。海外では物理的な規制による対策が進む中、本研究では日本の既存鉄道インフラを活用した移動の快適化による自発的な分散の可能性に着目した。具体的には、都心と郊外を結ぶ路線において、デュアルシート搭載車両を用いた着席保障サービスを導入・拡充することは、移動に伴う心理的障壁を取り除き、旅行客を郊外へ分散させる有効な手段となるという仮説を立て、その妥当性を検証することを目的とした。

仮説の検証にあたり、以下の手順を用いた。第1章では、ロングシート等の課題を整理し、デュアルシートの優位性を理論的に提示した。第2章では、しなの鉄道やQSEAT等の先行事例を分析し、着席保障が観光客にも受容されている現状を調査した。第3章では、首都圏の鉄道利用者100名へアンケートを実施し、混雑への意識と快適性への支払い意思を定量的に分析した。第4章では、東武東上線をモデルケースとし、競合する関越自動車道との所要時間比較および既存列車の乗車率調査に基づき、導入効果のシミュレーションを行った。

調査の結果、利用者の大半が混雑をストレスと捉えており、観光時には快適な移動に対し追加料金を支払う意思があることが判明した。またシミュレーションでは、渋滞時における鉄道の時間的優位性が確認された。これらより、着席保障サービスの本質的価値とは、単なる座席提供ではなく、移動の億劫さや荷物による他者への迷惑といった心理的障壁を除去することであり、それによって潜在的な訪問意欲を具体的な行動へ転換させる効果があると考察された。

以上の結果から、都内と郊外を結ぶ路線における着席保障サービスの導入は、都心部に集中する旅行客を郊外へ分散させる有効な手段であると結論付けられた。よって仮説は証明された。